

同志社大学文化情報学部蔵「奈良絵源氏物語色紙」の紹介（一）

福田 智子

同志社大学文化情報学部蔵「奈良絵源氏物語色紙」（請求番号：721.2/N10106、資料番号216700339）は、『源氏物語』の場面を一枚につき一場面ずつ描いた、「捲り」（屏風や襖などに貼ってあった絵を剥がしたもの）の状態の源氏絵、二十四枚である。大きさは、縦二四・二センチ、横一八・七センチ。製作年代は江戸時代中期頃と推察される。木箱（縦二七・〇センチ×横二〇・八×高さ七・七センチ）入りだが、専用に作られたものではあるまい。

本稿は、この絵の図柄について、『源氏物語』の巻や場面を特定し、いわゆる源氏絵の系譜の中に位置づけるものである。名だたる絵師が描いた作品でないことは一瞥して明白であるが、江戸期における源氏絵の類型の広がりを知る一助にはなるであろう。なお、「奈良絵」を冠して本源氏絵を呼称する点については、慎重に「奈良絵」を定義した上で、あらためて適切であるかを判断する必要があるが、現時点では、本学学術

情報検索システムに登録されている「奈良絵源氏物語」の名称を用いておく。以下、『源氏物語』の巻順に従い、桐壺・空蟬・若紫・末摘花・花宴・賢木・花散里の絵を取り上げる。すなわち、空蟬巻は二枚、その他の巻は各一枚の計八枚である。

凡例

一、冒頭に、同志社大学文化情報学部蔵「奈良絵源氏物語色紙」（以下、所蔵している学部名にちなみ「文情奈良絵」と略す。）の画像を示し、『源氏物語』五十四帖のうちの帖の通し番号と巻名を示す。

一、【場面】では、『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』（秋山虔・田口榮一監修、学習研究社、一九九七年四月二十一日新装第一刷発行。略称『源氏絵の世界』。）所載「源氏絵帖別場面一覧」（二九〇～三〇一頁）を参看し、該当する「場面」の記号

(アルファベット)と「場面内容概略」を挙げる。

一、【該当本文】では、角川古典大観『源氏物語』CD-ROM所収の校訂本文に拠って、該当する『源氏物語』本文を、小見出しとともに引用し、次の「解説」の着眼点となる部分には傍線を付す。ただし、小見出しは、「文情奈良絵」の場面を過不足なく示すものではない。また、()を付して、主語を補ったり、人物呼称を加えたりした箇所もある。さらに、同CD-ROMの「参考情報」機能を用いて、以下の校本および校訂本文の該当巻数と頁数を列挙する。

- ・『源氏物語大成』（中央公論社） 略称「大成」
 - ・日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「大系」
 - ・新日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「新大系」
 - ・日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「全集」
 - ・新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「新全集」
 - ・新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社） 略称「集成」
 - ・角川文庫『源氏物語』（角川書店） 略称「角川文庫」
 - ・玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店） 略称「玉上評釈」
- なお、次の「解説」「考察」において、『源氏物語』本文を引用する場合にも、同様に角川古典大観『源氏物語』CD-ROM所収の校訂本文を用いる。
- 一、【解説】では、「文情奈良絵」の図柄について、物語本文を

踏まえ、具体的に説明する。

- 一、【考察】では、他の源氏絵と図柄を比較検討する。まず『源氏絵の世界』掲載図版を参看し、図版番号もこれに拠る。
- ・「土佐光起筆源氏物語画帖」（江戸時代初期・個人蔵） 略称「光起画帖」
 - ・「源氏物語図屏風」（江戸時代前期・個人蔵） 略称「源氏屏風」
 - ・「源氏物語扇面屏風」（室町時代末期、個人蔵） 略称「扇面屏風」
- 〔注〕「源氏物語扇面屏風」は、『源氏絵の世界』110（142・143頁）の解説に、「藤岡家本扇面」とある作品である。全体の図版は、『特別展覧会 ヒューマン・イメージーわれわれは人間をどのように表現してきたのか？』（京都国立博物館編集・発行、平成十三年十月）57～61頁に、「源氏物語扇面貼交屏風 六曲一双」として収められているが、図版が小さく、本稿の考察には用いていない。ただし、「もとは金地屏風に貼交ぜられていたが、その後画帖に改装されていたことがある。」（作品解説・狩野博幸氏）という指摘は、文化財の継承という点で示唆に富む。本稿では、『源氏絵の世界』新装版（一九九七年四月）に拠る「扇面屏風」の略称を用いるが、『同』初版（一九八八年六

月)における本品の名称は「源氏物語扇面画帖」である。

また、以下の文献およびデータベースも適宜用い、所載図版の頁数あるいはURL等を示す。

○『源氏物語画帖』(京都国立博物館所蔵、土佐光吉画、後陽成天皇他書、勉誠社、平成九年四月。) 略称「京博光吉画帖」

○『石山寺蔵 四百画面 源氏物語画帖』(石山寺座主・鷲尾遍隆監修、中野幸一編集、勉誠出版、二〇〇五年四月。) 略称「石山寺画帖」

○承応三年(一六五四)版『源氏物語』 略称「承応版」

○『源氏絵集成』(佐野みどり監修・編著、藝華書院、二〇一一年一月。) 略称「佐野集成」 所収

・「源氏物語色紙貼付屏風」(三重県立斎宮歴史博物館・安土桃山時代) 略称「斎宮歴博色紙屏風」

・「伝狩野光信筆源氏物語図」(大分市歴史資料館・桃山時代) 略称「大分市資料館光信図」

○『土佐派源氏絵研究』(和泉市久保惣記念美術館編集・発行、令和二年三月。) 略称「土佐派源氏」 所収

・「土佐光吉 源氏物語手鑑」 略称「久保惣光吉手鑑」

・「伝土佐光則 源氏物語扇面貼交屏風」 略称「久保惣光則屏風」

略称「久保惣土佐派貼交」

○新日本古典籍総合データベース

・「源氏物語絵屏風」書誌 ID: 200020990 DOI: 10.20730/200020990 国文学研究資料館所蔵 <https://kotenski.nijl.ac.jp/biblio/200020990/viewer/1> 略称「国文研絵屏風a」

・「源氏物語絵屏風」書誌 ID: 200019740 DOI: 10.20730/200019740 国文学研究資料館所蔵 <https://kotenski.nijl.ac.jp/biblio/200019740/viewer/3> 略称「国文研絵屏風b」

○◎徳川美術館イメージアーカイブ／DNPartcom) 略称「徳川本光則画帖」

「源氏物語画帖」(土佐光則、十七世紀、徳川美術館所蔵)

これ以外の文献およびデータベースを参照した場合は、逐一、書誌情報を明記する。

また、『奥入』の引用は、定家自筆本である大橋寛治氏蔵本

『奥入』(日本古典文学会監修、昭和四十六年十月)の影印に拠り、適宜、表記を改めた。

第一帖 桐壺



【場面】D：清涼殿東廂にて源氏元服の儀式。左大臣加冠の役を務める。

【該当本文】「25」源氏十二歳で元服、帝そのすばらしさに感嘆する

^A この君の御童姿、いと変へまうくおほせど、十二にて御元服したまふ。おたちおほしいとなみて、限りあることに、ことをそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式よそほしかりし御ひびきに落とさせたまはず。ところどころの饗など、内蔵寮、穀倉院など、おほやけごとにつかうまつれ

る、おろそかなることもぞ、ととりわき仰せごとありて、きよらをつくしてつかうまつれり。

(帝の) おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣(≡左大臣)の御座、御前にあり。申の時に源氏参りたまふ。角髪結ひたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大藏卿、蔵人つかうまつる。いとよらなる御髪をそくほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおほしいづるに、たへがたきを、心強く念じかへさせたまふ。

【大成】1巻24頁、「大系」1巻47頁、「新大系」1巻24頁、「全集」1巻121頁、「新全集」1巻44頁、「集成」1巻36頁、「角川文庫」1巻44頁、「玉上評釈」1巻133頁

【解説】

画面右上角に桐壺帝が描かれる。椅子に座し、顔は描かれな^{うえのはかま}い。表袴は^{あら}靱紋である。画面左側やや上には、鬢結の光源氏が、笏を持って座っている。桐壺帝の前に跪いている公卿は、大藏卿であろう。下襲の後ろに裾を長く引いた束帯姿で、乱箱を両手で捧げ持つ。箱の内側には布が張っており、その紋様が描かれているところから、中身は空であろう。

孫廂には、衣冠を着した貴族が三人描かれる。二人は黒袍(四位以上が着用)、最も左の一人は緋袍(五位が着用)であ

る。中央の黒袍の貴族のみ笏を持つ。

【考察】

源氏元服の場面は、桐壺巻の中でも絵画化される代表的なもののひとつであるが、「文情奈良絵」は、椅子に座す桐壺帝と、童姿の源氏、そして、理髪役の大蔵卿が帝の前で乱箱を捧げ持つ場面であり、源氏の元服式開始時点の図柄と考えられる。『源氏物語』本文には、このような場面は詳述されないが、古注釈においては、早くも『奥入』に、「延長七年二月十六日當代源氏二人元服」の詳細な記述があり、「理髪ノ具」を「柳筥ニ盛ル」とある。「文情奈良絵」の大蔵卿が持つ箱には後に、理髪の道具や、削いだ髪を束ねて入れることが予想される。

『源氏物語』本文で語られない元服式の様子を描いた絵としては、他に毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」(慶長十六年制作)、『絵巻で読む源氏物語—毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」』、龍澤彩編著、平成二十九年三月、4頁、略称「毛利博本」がある。そこには、帝の御前で文書を読み上げる公卿の姿が描かれる。同書の解説で龍澤氏は、「皇太子の元服にあたって祝詞を述べるときたり」に則った図柄と推察されている。これと同じ公卿の姿は、「国文研絵屏風a」にも見える。また、「国文研絵屏風b」では、公卿は冠を捧げ持っている。このように、帝の前に進み出た公卿を描くという共通した図柄の中に、公卿が手

にする品として、元服式を象徴的に示すもののバリエーションが生まれているように見受けられる。

土佐光信『源氏物語画帖』(室町時代、Harvard 美術館蔵、略称「ハーバード画帖」、<https://hvrd.art/o/201120>)では、公卿の目の前に猫足の台が描かれ、また、「源氏物語色紙」(桃山〜江戸時代、奈良大学博物館蔵、略称「奈良大色紙」、<https://www.nara-u.ac.jp/museum/collection/paintings.html>)では、三宝に載る盃を前に公卿が畏まり、その脇に長柄銚子らしき具を持つ公卿が控える。これらも一連の元服式における一場面を描いたものと推察される。

なお、「徳川本光則画帖」コレクション No. TAM 000267 (<https://images.dmpart.com.jp/ia/workDetail?id=TAM000267>)では、乱箱を持つ束帯姿の公卿が童姿の源氏を先導するように孫廂に立ち、後に続く源氏の方を振り返っている姿が描かれている。元服式入場の場面であろう。

さて、「文情奈良絵」と同様の構図で公卿が乱箱を持つ図柄は、早くも桃山時代の「久保惣光吉手鑑」(『土佐派源氏』7頁)に見受けられる。構図は左右反転しているが、椅子に座す桐壺帝(顔は御簾で隠れ、表袴は叢紋)、畳に座る鬘結の源氏、帝の前で乱箱を捧げ持つ大蔵卿の姿が描かれる。詞書は、「該当本文」Aである。また、「源氏物語図色紙」(堺市博物館収蔵

品データベース https://mapps.ne.jp/sakaihak/wdet.html?data_id=284 作者：土佐派、制作年代：江戸時代。資料番号：1984-027。略称「堺市博色紙」は、「文情奈良絵」と同じく、右上に帝が座し、左側に源氏、帝の前に大藏卿を配置する。さらに、「石山寺画帖」桐壺六（六六図）も、付箋に「同六 源氏けんふくの所也 みつらゆひ給へるつらつきさまかへたまはん事いとをしげ也と云所也」とあり、場面解説にも「理髪（りぱつ）の箱をおしいただいているのが理髪役の大藏卿」（10頁）と述べられているように、「文情奈良絵」とは左右反転の構図ながら、同じ場面を描いたものである。そうすると本図柄は、源氏元服の場面として比較的早くから描かれ、ひとつの型として定着していたようである。ただし、「文情奈良絵」は、以上の源氏絵とは異なり、帝の両脇の獅子狛犬を描かず、また、源氏は笏を持つ姿である。

これら二点を含めて「文情奈良絵」と酷似するのが、「久保惣土佐派貼交」（江戸時代前期、『土佐派源氏』160頁）である。だが、この絵に対応する詞書は、『源氏物語』では前掲「該当本文」の後に語られる、左大臣が「御禄のもの」として「白き大桂に御衣一領」を下賜される場面の一節（傍線B）である。

〔26〕源氏、元服の添い臥しとして左大臣の娘の葵の上と結婚

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御禄のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大桂に御衣一領、例のことなり。御盃のついでに、

いときなきはつもとゆひに長き世を契る心は結びこめ
つや

御心ばへありて驚かさせたまふ。

結びつる心も深きもとゆひに濃き紫の色しあせずは

と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。

この本文Bを絵画化する場合、たとえば「源氏屏風」5（『源氏絵の世界』31頁）に見えるように、帝の御前で左大臣が拝礼する（あるいは衣を戴く）図柄が描かれる。それは、源氏元服式の前に帝の御前で大藏卿が乱箱を戴く図柄と似通つてこよう。絵と詞書とがびつたり一致しないことは少なくないが、「久保惣土佐派貼交」のように、本文Bと元服式の絵とを対応させた作品は、元服式前後の場面の混同を助長する一因になったであろう。

なお、先の「源氏屏風」5において、元服式後の場面であるにも関わらず、源氏は童姿で描かれる。元服式という行事を、時系列を越えて象徴的に示したものか。

また、「文情奈良絵」の帝の表袴の叢紋は、「ハーバード画

帖」「奈良大色紙」「源氏屏風」にも見える。さらに、帝の他、公卿の表袴にも霰紋があるのは、「国文研絵屏風 a」「国文研絵屏風 b」「徳川本光則画帖」「久保惣光吉手鑑」「堺市博色紙」「久保惣土佐派貼交」であり、これらの中には、孫廂にいる公卿の表袴にまで霰紋を描くものもある。一方、帝にも公卿にも表袴の霰紋が描かれないのは、「石山寺画帖」「毛利博本」である。源氏元服式の場面の図柄、延いては帝や公卿の姿を描く大和絵の図柄の継承を把握する上で、表袴の霰紋は、あるいはひとつの指標となり得るか。バイエルン州立図書館蔵『源氏物語』（『在外日本重要絵巻選』研究編付 DVD-ROM、辻英子編著、風間書院、平成二十六年二月）桐壺巻の表紙にも、帝らしき人物の表袴に霰紋が見える。

第三帖 空蟬（一）



【場面】 A…源氏、小君の手引きで中川の邸に忍び、空蟬と軒端萩が碁をうつ姿を隙見する。

【該当本文】「3」源氏は空蟬と軒端の萩との碁を打つ姿をかいま見る

東の妻戸に立てたてまつりて、われは南の隅の間より、格子叩きののしりて入りぬ。御達、「あらはなり」と言ふなり。「なぞ、かう暑きに、この格子はおろされたる」と問へば、「昼より西の御方の渡らせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。さて向かひるたらむを見ばやと思ひて、やをら歩みいでて、簾のは

さまに入りたまひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、ひま見ゆるに寄りて、西さまに見通したまへば、このきはに立てたる屏風、端のかたおし畳まれたるに、まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うちかけていとよく見入れらる。

火近うともしたり。母屋の中柱にそばめる人やわが心かくる(空蟬)、とまづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに、小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、さし向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦せ瘦せにて、いたうひき隠しためり。今一人(軒端の荻)は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へるきはまで胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき、額つき、ものあざやかに、まみ、口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかに、長くはあらねど、さがりば、肩のほどこきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめ、とをかしく見たまふ。ここぞなほ静かなるけを添へばや、とふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。

〔大成〕 1巻86頁、〔大系〕 1巻110頁、〔新大系〕 1巻85頁、〔全

集〕 1巻193頁、〔新全集〕 1巻119頁、〔集成〕 1巻107頁、〔角川文庫〕 1巻95頁、〔玉上評釈〕 1巻308頁

【解説】

画面右上には碁を打つ女性が二人描かれる。空蟬と軒端の荻である。右手で黒の碁石を持つている横顔の女性が空蟬か。そうすると、向かいあうもう一人の女性は軒端の荻であろう。ややふつくらとした顔立ちで、小桂の下から緋袴の裾を長く引いている。

傍らの燈台には火が灯され、その奥の御簾は巻き上げてある。画面左上には違い棚があり、その上に書物が置かれている。

左側の部屋に立つ男性貴族は源氏である。ただし、先の女君を覗き見ているというよりは、簾が巻き上げてあるもうひとつの部屋にまっすぐ歩いていく姿のように見える。その視線の先、右下の部屋には、屏風の陰に座す女性がいる。この邸の女房であろう。

【考察】

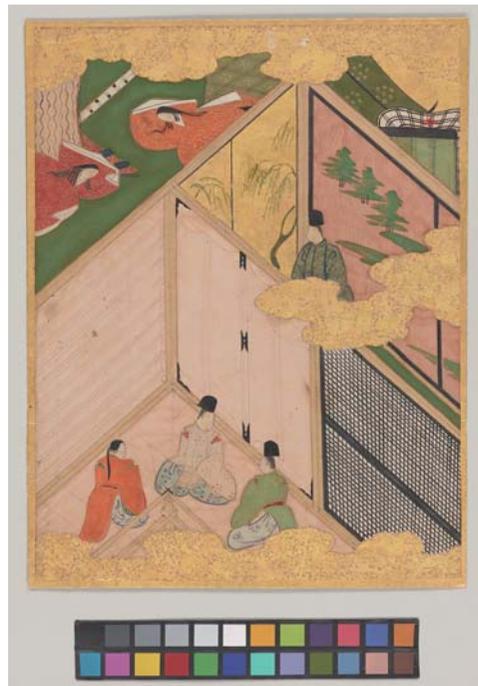
空蟬と軒端の荻が碁を打っているところを源氏が垣間見る場面は、空蟬巻を代表する図柄のひとつである。同様の構図は、『京博光吉画帖』(7頁)や『斎宮歴博色紙屏風』(安土桃山時代、『佐野集成』22頁)に見られる。碁盤を挟んで差し向かう

空蟬と軒端の萩、部屋の外に立つ源氏の他、部屋の奥の違い棚に書物が重ねて置いてある描写も共通する。

ただし、「文情奈良絵」にある右下方、女房が屏風の陰にいる部屋は、これらの源氏絵には描かれない。あるいは、「京博光吉画帖」「齋宮歴博色紙屏風」が正方形の絵であるのに比べ、長方形の「文情奈良絵」には、構図上、画面の余白が生まれたためであったかもしれない。

なお、空蟬巻の碁を打つ場面に、手引きをした小君を描いた絵には、「承応版」空蟬巻第一図や「石山寺画帖」空蟬一（一六図）、「国文研絵屏風」などがあるが、「文情奈良絵」に小君の姿はない。この点でも、「文情奈良絵」は、「京博光吉画帖」「齋宮歴博色紙屏風」と共通している。

第三帖 空蟬（二）



【場面】B…源氏、小君の手引きで空蟬と軒端萩とが共寝する部屋に忍び入る。

【該当本文】

〔3〕源氏は空蟬と軒端の萩との碁を打つ姿をかいま見る

（小君は）幼きこことに、いかならむをりと待ちわたるに、紀伊守国にくだりなどして、女どちのどやかなる夕闇の、道たどたどしげなるまぎれに、わが車にて率てたてまつる。この子も幼きをいかならむとおぼせど、さのみもおぼしのだもまじければ、さりげなき姿にて、門など鎖さぬさきに、といそぎお

はす。人見ぬかたよりひき入れて、おろしたてまつる。童なれば、宿直人などにも見入れ追従せず、心やすし。

〔6〕源氏は部屋に忍び入るが、それと気づいた空蟬はすべり出て隠れる

こたみは妻戸をたたきて入る。みな人々静まり寝にけり。「この障子口にまろは寝たらむ。風吹きとほせ」とて、畳ひろげて臥す。御達、東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童べも、そなたに入りて臥しぬれば、とばかり空寝して、火明きかたに屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。いかにぞ、をこがましきこともこそとおぼすに、いとつつましけれど、導くままに母屋の几帳の帷ひきあげて、いとやをら入りたまふとすれど、みな静まれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしも、いとしるかりけり。

〔大成〕 1巻89頁、「大系」 1巻14頁、「新大系」 1巻89頁、「全集」 1巻197頁、「新全集」 1巻123頁、「集成」 1巻111頁、「角川文庫」 1巻98頁、「玉上評釈」 1巻318頁

【解説】

吹抜屋台の梁により、邸内がふたつと、簀の子縁、そして牛車が止まる邸外に分けられた構図である。画面左上の室内にいるのは空蟬と軒端の萩、その戸口近くに立つのは源氏である。左下の簀の子縁に座している従者は、邸外に止まっている牛車

の車副くるまのふたごと童と見られる。小君は自分の車で、源氏を紀伊守の邸にこっそりと連れて来たのであった。

【考察】

「文情奈良絵」空蟬巻の絵の二枚目である。このことから、一連の当該源氏絵が、ひとつの巻について複数の絵を有する場合のあったことが知られる。

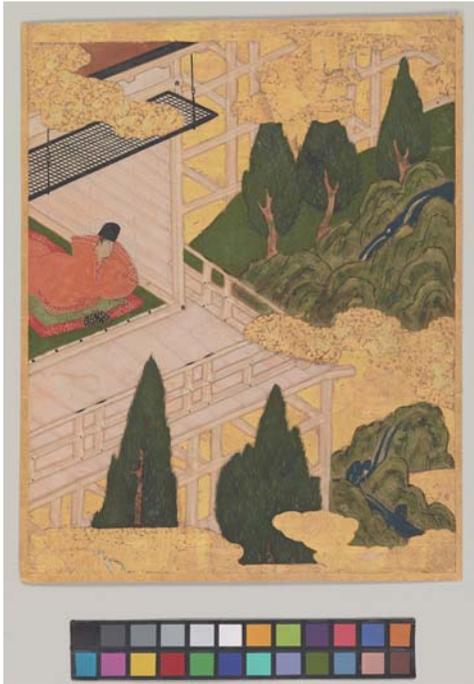
さて、同様の構図は、「徳川本光則画帖」コレクション No. TAM 000273 (<https://images.dnparc.com.jp/ia/workDetail?id=TAM000273>) に見える。画面左上の空蟬と軒端の萩、画面右上の源氏の立ち姿が共通する。だが、この「徳川本光則画帖」が、傍らの小君の方を振り返っている姿を描くのに対し、「文情奈良絵」には小君は描かれず、源氏は女君たちの居室の方を向いて立っている。

さらに「文情奈良絵」には、この「徳川本光則画帖」にはない、画面右上角の牛車と簀の子縁に座る車副と童が描かれる。これは、「該当本文」にも示したように、小君が源氏を連れて来た際の牛車であろう。牛車を使うには車副と童が不可欠であるが、当たり前前の事柄であるがゆえに物語はそれらについて語らない。物語を絵画化する上では、物語には表面上出てこない、このような具体的な現場の描写が必要な場合もある。

なお、「文情奈良絵」の二人の車副と一人の童に酷似した描

写が、前掲の「徳川本光則画帖」86（『源氏絵の世界』115頁）玉鬘巻に見られる。こちらの絵では、画面下方に二本の斜線で画面を仕切り、車三台の屋根と邸外に立つ童一人、従者三人を描く。このうち、童は、向かって左側の位置で右向きの横顔を見せ、中央と右側の従者は互いに顔を見合わせている。この画面の仕切り方と童・従者の配置が「文情奈良絵」と共通する。牛車とともに描くべき童と車副の絵の型は、ある程度定着していたのであろう。

第五帖 若紫



【場面】D…源氏、物思いに悩み眠れぬ。滝の音も強くなったように聞こえる。

【該当本文】「9」源氏は尼君に若紫との結婚を申し込む

君はこちもいとなやましきに、雨少しうちそそき、山風ひややかに吹きたるに、滝の淀みもまさりて、音高う聞こゆ。少しねぶたげなる読経のたえだえすこく聞こゆるなど、すずろなる人も、所からもあはれなり。ましておほしめぐらすこと多くて、まどろませたまはず。初夜と言ひしかども、夜もいたうふけにけり。

【大成】1巻162頁、「大系」1巻191頁、「新大系」1巻164頁、「全集」1巻289頁、「新全集」1巻215頁、「集成」1巻197頁、「角川文庫」1巻162頁、「玉上評釈」2巻60頁

【10】深山の暁がたの眺め

暁がたになりにければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえ来る、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

「さしぐみに袖濡らしける山水にすめる心は騒ぎやはする耳馴ればべりにけりや」と聞こえたまふ。

明けゆく空は、いといたうかすみて、山の鳥ども、そこはかとなう囀りあひたり。名も知らぬ木草の花ども、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみありくもめづ

らしく見たまふに、悩ましさもまぎれはてぬ。

〔大成〕 1巻165頁、「大系」 1巻195頁、「新大系」 1巻167頁、「全集」 1巻293頁、「新全集」 1巻219頁、「集成」 1巻201頁、「角川文庫」 1巻165頁、「玉上評釈」 2巻67頁

【解説】

画面左側を中心に、山中の懸造りの建物が描かれる。床下を固定する格子状の柱と貫は、画面右上から左下に続いている。半部を上げた邸内には、枕を外し褥の上で上半身を起こして外を眺める源氏の姿が描かれる。わらわ病みの加持を受けるため訪れた北山で、物思いをして眠れずにいる源氏である。

また、画面右側には、山中の岩間を流れ落ちる滝が、途中に金雲をはさんで流れ落ちるさまが描かれる。懸造りの柱と貫、および滝の流れの描写が、この情景の奥行きと高低差を感じさせる。

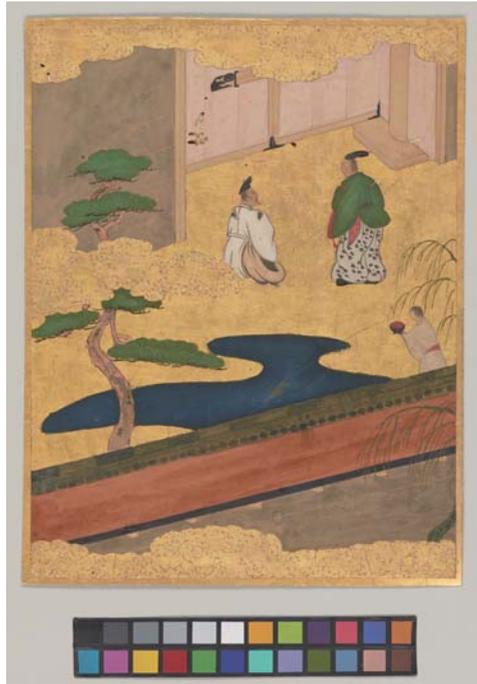
【考察】

「文情奈良絵」の構図は、「久保惣光吉手鑑」(「土佐派源氏」13頁)と共通する。画面左上に褥の上の源氏を、また源氏がいる山荘の床下に懸造りの斜めの格子を、そして画面右側に向きを変えながら流れ落ちる滝を描く。「この場面は、光吉以前の作例には見あたらないが、ほとんど同じ図様を光則が白描画帖の二図としているほかに、いくつかの源氏絵屏風で、若紫を代

表する場面として描かれている。」(『源氏絵の世界』47頁)とされる図柄である。「久保惣土佐派貼交」(江戸時代前期、『土佐派源氏』164頁)にも、同様の絵柄を見出す。

なお、「久保惣光吉手鑑」が山中に多くの桜を描くのは、若紫巻冒頭近くの「三月の晦日なれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、……」という部分に依拠したものである。「久保惣土佐派貼交」でも、わずかではあるが桜が描かれている。一方、「文情奈良絵」には桜はおろか「木草の花」も見当たらず、緑が濃く太い木々が繁る山中の趣きである。

第六帖 末摘花



【場面】 場面掲載なし

【該当本文】 「16」 門番の翁の門を開けかねる姿に同情を寄せる御車いづべき門は、まだ開けざりければ、鍵の預かり尋ねいでたれば、翁のいとみじきぞいで来たる。むすめにや、孫にや、はしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき深うて、あやしきものに、火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえあけやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人寄りてぞ開けつる。

「ふりにける頭の雪を見る人もおとらず濡らす朝の袖かな

幼き者は形蔽れず」とうち誦じたまひても、鼻の色にいでて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひいでられて、ほほ笑まれたまふ。頭の中將にこれを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、今見つけられなむ、とすべなうおほす。

【大成】 1巻223頁、「大系」 1巻259頁、「新大系」 1巻227頁、「全集」 1巻369頁、「新全集」 1巻296頁、「集成」 1巻273頁、「角川文庫」 2巻40頁、「玉上評釈」 2巻225頁

【解説】

画面上方には、門かみをしたままの門がある。門の前に立っている二人の男性は、無紋の直衣を着ている。左側の年かきの人物は「翁」と見られる。一方、右側の人物は、若者の顔かたちに描かれている。源氏の「御供の人」であろう。

また、画面右下には、土塀の陰から、器を手にした童が、先の二人のもとに近づいていく姿が見える。「翁」の「むすめにや、孫にや、はしたなる大ききの女」が、火を入れた器を袖に抱えて持つて来るさまを描いたものである。

【考察】

源氏が末摘花の邸から帰ろうとしたところ、この邸の困窮ぶりを象徴的に示すのは、門を開けるのもままならぬ老人と、みすばらしい姿で寒さに震えながら火を持つてくる女子であつ

た。物語では、源氏もこの情景を眺めているのだが、「文情奈良絵」には、邸の外を眺める源氏の姿は描かれず、上方の門と下方の土塀との間に、一本の松と供人たちの姿を描く。物語に即して絵を観る者の視点は、自ずと物語中の源氏の視点に重なってこよう。

この図柄は、「承応版」末摘花巻、第四図にも見えるが、女子は火を持っておらず、門を開けようとする老人の側に歩み寄り、手伝おうとしているように見える。

また、「石山寺画帖」末摘花六(五一図)は、付箋に「同(末摘花)六 末つむにてたち花の雪をはらはせ給ふ所也 ぶりけるかしらの雪をと云うたの所也」と記されるとおり、画面中央には、「該当本文」に掲げた本文の直前、「橋の木のうちもれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどに、あひしらはむ人もがなと見たまふ。」という内容をも描いており、画面右上には、庭を眺める源氏の姿もある。一方、画面左方の門の側に老人と源氏の供人、そして、画面中央下方の、器に火を入れて持つ女子は、「文情奈良絵」と共通する図柄である。

なお、「文情奈良絵」では、翁や供人に比べ、この女子の姿は平面的で粗雑な描き方に見える。後から描き足したもののか。

第八帖 花宴



【場面】A…桜花の宴の果てた月夜、源氏、弘徽殿の細殿で扇をかざして歩いてくる女(朧月夜)に逢う。

【該当本文】「3」源氏は弘徽殿の細殿で朧月夜と逢い、扇をしるしに取り替えて別れる

夜いたうふけてなむ、ことはてける。上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさしいでてをかしきを、源氏の君酔ひごこちに、見すぐしがたくおぼえたまひければ、上の人々もうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべきひまもやある、と藤壺

わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿にたち寄りたまへれば、三の口開きたり。女御は、上の御局に、やがてまうのほりたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の板戸も開きて、人音もせず。かやうにて世の中のあやまちはするぞかしと思ひて、やをらのほりてのぞきたまふ。

人はみな寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あなむくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「なにかうとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおほろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱きおろして、戸はおしたてつ。あさましきにあされたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、「ここに、人」とのたまへど、「まろは、みな人に許されれば、召し寄せたりとも、なむでふことかあらむ。ただ忍びてこそ」とのたまふ声に、この君なりけり、と聞き定めて、いささか慰めけり。

(朧月夜は) わびしと思へるものから、なさげなくこはこはしうは見えじ、と思へり。酔ひごこちや例ならざりけむ、許さ

むことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女はまして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。「なほ名のりしたまへ。いかで聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともおほされじ」とのたまへば、

思ふ

憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとやと言ふさま、艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえたがへたる文字かな」とて、

け

「いづれぞと露の宿りをわかむまに小笹が原に風もこそ吹わづらはしくおほすことならずは、なにか包まむ。もし、すかいたまふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきどもしげく迷へば、いとわりなくて、扇ばかりを^{しるしにとりかへて、いでたまひぬ。}

【大成】 1巻270頁、「大系」 1巻305頁、「新大系」 1巻276頁、「全集」 1巻425頁、「新全集」 1巻355頁、「集成」 2巻51頁、「角川文庫」 2巻78頁、「玉上評釈」 2巻333頁

【解説】

画面は、邸の貫や欄干などが左下方から右斜め上に描かれ、画面を上部から、邸外と孫廂、細殿、邸内に仕切られた構図で

ある。

細殿の中央には男女の貴族の姿が描かれる。源氏は朧月夜に近づき、両手を彼女の方に差し伸ばしている。朧月夜は、左手に扇を持ち、顔は源氏の方を向きながら、衣の裾をひるがえして源氏から逃げようとしているように見える。

画面左上には二十日過ぎの月が浮かぶ。桜の木が枝を広げ、淡い紅の花を付けている。枝の上方は金雲を突き抜けるように描かれる。

【考察】

時は二月二十日あまり、南殿の桜の宴の後、弘徽殿の細殿に入り込んだ源氏が、朧月夜に出逢い、袖を捉えようとしている場面であろう。朧月夜が手にしているのは、いわゆる「しるしの扇」で、本場面を象徴的に示す。

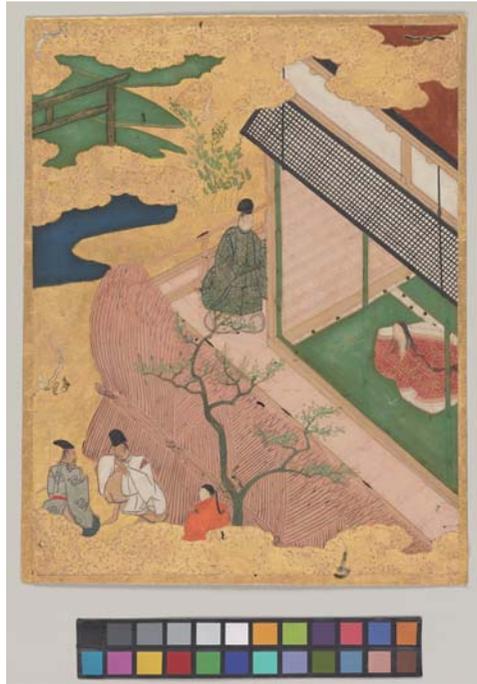
源氏と朧月夜との出逢いの場面において、二人の間には空間的な距離や隔てが多い。「京博光吉画帖」(17頁)、「扇面屏風」35(『源氏絵の世界』58頁)、「久保惣光則屏風」(『土佐派源氏』101頁)、「石山寺画帖」花宴一(六五図)、「国文研絵屏風a」は、「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさむ朧月夜を、源氏が物陰からうかがっているという構図である。このとき朧月夜は、邸の外の方、月を眺める姿である。

一方、「久保惣土佐派貼交」(『土佐派源氏』167頁)や「斎宮

歴博色紙屏風」(『佐野集成』24頁)では、源氏と朧月夜との間に物の隔てはなく、両者の距離が接近している。とくに「斎宮歴博色紙屏風」は、月を眺める朧月夜に源氏が手を伸ばしかけている。両者がさらに近づいているのが「文情奈良絵」で、源氏は朧月夜の袖を今にも取らんばかりである。一方の朧月夜の姿は、この男性貴族を見て、とっさに身を翻しているように見える。この男性が源氏だとわかると、きっぱりと源氏を拒絶するわけでもないのであるが、この時点での朧月夜の驚愕の様子が看取されよう。

この場面において、両者が近接して立ち、朧月夜が源氏の方を向いている図柄は、「大分市資料館光信図」(『佐野集成』241頁)、「国文研絵屏風b」に見えるが、両者の立つ位置関係や全体の構図は、「文情奈良絵」とは異なっている。

第十帖 賢木



【場面】 A…晩秋の野宮に六条御息所を訪ねた源氏、柳の枝を御簾の中に差し入れ、歌を交わす。

【該当本文】 「2」源氏は御息所との対面を強く求め、野の宮を訪れる

九月七日ばかりなれば、むげに今日あすとおほすに、女がたもいと心あわたたしけれど、立ちながら、とたびたび御消息ありければ、いでやとおぼしわづらひながら、いとあまり埋もれいたきを、もの越しばかりの対面は、と人知れず待ちきこえたまひけり。

はるけき野辺をわけ入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花みな衰へつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すごとく吹き合はせて、そのことも聞きわかれぬほどに、もの音どもたえだえ聞こえたる、いと艶なり。

むつまじき御前十余人ばかり、御隨身ことごとしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつくるひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なる好き者ども、所からさへ身にしてみて思へり。御心にも、などて今までたちならざざりつらむ、と過ぎぬるかた悔しうおぼさる。ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居ども、さすがに神々しう見たたされて、わづらはしきけしきなるに、神官の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさまざまはりて見ゆ。火焼き屋かすかに光りて、人げ少なくしめじめとして、ここにももの思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどをおほしやるに、いといみじうあはれに心苦し。

〔大成〕 2巻334頁、「大系」 1巻368頁、「新大系」 1巻343頁、「全集」 2巻76頁、「新全集」 2巻84頁、「集成」 2巻128頁、「角川文庫」 2巻134頁、「玉上評釈」 2巻494頁

〔3〕御息所はためらいながらも源氏と対面し、歌の贈答

北の対のさるべきところにたち隠れたまひて、御消息聞こえ

たまふに、遊びはみなやめて、心にくきけはひあまた聞こゆ。

なにくれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、いとものしとおほして、(源氏)「かうやうのありきも、今はつきなきほどになりにてはべるを思ほし知らば、かう標のほかにはもてなしたまはで、いぶせうはべることをもあきらめはべりにしかな」と、まめやかに聞こえたまへば、人々、「げに、いとかたはらいたう、たちわづらはせたまふに、いとほしう」など、あつかひきこゆれば、(御息所)

いさや、このひと目も見苦しう、かのおぼさむことも若々しう、いでるむがいまさらにつつましきこと、とおぼすに、いとももの憂けれど、なさけなうもてなさむにもたけからねば、とかくうち嘆きやすらひて、みざりいでたまへる御けはひ、いと心にくし。(源氏)「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」とて、のぼりゐたまへり。はなやかにさしいでたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、匂ひに似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりければ、櫛をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、「変はらぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」と、聞こえたまへば、

(御息所) 神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる櫛ぞ

と聞こえたまへば、

(源氏) 少女子があたりと思へば櫛葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

【大成】2巻335頁、「大系」1巻369頁、「新大系」1巻344頁、「全集」2巻78頁、「新全集」2巻86頁、「集成」2巻130頁、「角川文庫」2巻135頁、「玉上評釈」2巻499頁

【解説】

画面右側の邸には、葎を上げ、簾を下ろした中に、六条御息所が、簀の子の方を向いて座っている。画面中央、邸の角の簀の子に立っている源氏は、櫛の枝を手にしている。

簀の子の斜め線に即して描かれるのは小柴垣で、邸の外回りの垣根である。比較的大きく描かれているのは、「小柴垣を大垣にて」とあるのをそう解釈したのであろう。その小柴垣の傍ら、画面左下に、三人の人物がいる。中央の白い水干の人物は野々宮の神官であろう。これと向かい合うのは牛車の車副か。とすれば、少し間を置いて立つのは牛飼い童と見られる。

この場面を象徴する「黒木の鳥居」は、画面左上、金雲の絶え間に描かれる。その右側には、金雲に重ねて草木が描かれる。丸く平たい葉の植物は、秋の七草のひとつ、萩であろう。

【考察】

賢木巻を代表する場面である。「黒木の鳥居」で野々宮を象徴的に示し、御簾の内の御息所、角の簀の子に神を持って立つ源氏、神官や従者たちを描く類例には、「京博光吉画帖」（21頁）、「久保惣光吉手鑑」（『土佐派源氏』19頁）など数多い。また、「久保惣土佐派貼交」（『土佐派源氏』169頁）は、同様の場面を描きながら、源氏は上半身を御簾の内に入れた姿である。

以上の源氏絵は、「文情奈良絵」とは異なり、いずれも牛車の一部（屋根など）を描く。物語には表面上出て来ないが、源氏が野々宮に趣くために乗ってきた牛車である。とすれば、そこに描かれる従者たちの中に、車副や牛飼い童が自ずと描かれることにもなる。 「文情奈良絵」も、牛車を描かないことを除けば構図が似通っているだけに、同様の人物の配置が想定される。

そこで、従者たちの人数を見てみると、「文情奈良絵」と同じく三人なのは、「京博光吉画帖」「久保惣土佐派貼交」であるが、白い水干の神官は二人で、残りの一人は、「京博光吉画帖」では車副、「久保惣土佐派貼交」では童であろう。一方、従者たちが五人いるのが「久保惣光吉手鑑」である。中央の一人は白い水干の神官で、その両脇には二人ずつ、向かい合った人物が配されている。二人のうち左側が車副、右側が童と見られる。

るとすると、「文情奈良絵」は「久保惣光吉手鑑」の二組の車副と童のうちの一組を取り上げ、中央に神官を配置して、簡略化した図柄とも捉え得る。また、神官の顔の傾きや姿勢が酷似する点にも注意しておきたい。

なお、当該場面には、秋の風情を醸し出す秋の七草が描かれる。とくに萩は、草木の描写が少ない「文情奈良絵」にも描かれている。

第十一帖 花散里



【場面】B：源氏、麗景殿女御（花散里の姉）のもとでも時鳥を聞き、昔話をしてから、花散里に逢う。

【該当本文】「3」麗景殿の女御と昔語りをし、歌の贈答

かの本意のところは、おぼしやりつるものしく、ひと目なく静かにておはするありさまを見たまふもいとあはれなり。まづ、女御の御かたにて、昔の御もの語りなど聞こえたまふに、夜ふけにけり。二十日の月さしいづるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き橘のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしきかたにはおぼしたりしものを、など思ひいできこえたまふにつけても、昔のことかきつらねおぼされて、うち泣きたまふ。

郭公、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、とおぼさるるほど艶なりかし。「いかに知りてか」などしのびやかにうち誦じたまふ。

〔源氏〕橘の香をなつかしみほととぎす花散里を尋ねてぞとふ

いにしへの忘れがたき慰めには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそまぎるることも、数そふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語りもかきくづすべき人少

なうなりゆくを、ましてつれづれもまぎれなくおぼさるらむ」と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれにおぼし続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞそひにける。

〔麗景殿女御〕ひと目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつ

まとなりけれ

とばかりのたまへる、さは言へど人にはいとことなりけり、とおぼしくらべらる。

〔大成〕2巻389頁、「大系」1巻419頁、「新大系」1巻397頁、「全集」2巻148頁、「新全集」2巻155頁、「集成」2巻195頁、「角川文庫」2巻185頁、「玉上評釈」2巻640頁

【解説】

画面右下には立ち姿の源氏が描かれ、画面左上方に飛んでいる一羽の郭公を見上げている。その傍らに座り、横顔を見せているのは亡き桐壺院の女御、麗景殿であろう。

源氏らがいる部屋には簀の子縁があり、同様のものは画面右上角にも描かれる。また、建物と庭との間には立藪たてしほがある。橘の木は、邸内から見ると、その立藪の手前にある。郭公の声と花橘の香に催され、源氏と麗景殿女御が歌を交わす場面である。庭には築山と、岩を配した池が描かれる。

【考察】

花散里巻は短い巻であるが、絵画化されるにあたり、ふたつの代表的な場面がある。ひとつは、源氏が中川の辺りで琴の音をきっかけにかつての女性と歌を交わす場面、そしてもうひとつは、当該場面である。いずれも和歌の贈答が場面の中心にある。

「文情奈良絵」と同様の場面は、「光起画帖」45（『源氏絵の世界』67頁）、「石山寺画帖」花散里二（八六図・90頁）、「光則貼交」（『土佐派源氏』104頁）、「久保惣土佐派貼交」（『土佐派源氏』170頁）などに見られ、「承応版」花散里巻でも、唯一の挿画がこの場面である。ただし、いずれも源氏は麗景殿とともに室内に座し、そこから外を眺めるという図柄である。「文情奈良絵」のように、この場面において、立ち姿で源氏を描くは、どうやら一般的ではないようである。

附記

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータベース教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究、二〇二二～二〇二四年度、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二二年度）、および同志社大学宮廷文化研究センター（二

〇二一～二〇二五年度）における研究成果の一部であり、第一帖桐壺巻については、夏の研究集会（二〇二二年九月六日 Zoom開催）にて、その骨子を発表したものである。

本稿執筆にあたり、岩坪健氏には、全体にわたって多くのご教示を賜った。また、とくに桐壺巻の元服式に関する知見については、山科言親氏に貴重なご教示をいただいた。さらに、瀧山嵐氏は、国文学研究資料館所蔵の屏風二点をお示しくださった。ここに厚く御礼申し上げる。

（第21期第6研究会による成果）